平成 29 年度　（仮称）岐阜市未来ビジョン民間懇話会　ひと分科会　議事録　概要

【日　時】平成３０年１月３０日（火）１０時００分～１２時００分
【場　所】岐阜市役所本庁舎高層部４階　４－１会議室
【出席者】徳広圭子ひと分科会長、井上いほり分科会員、岡田芳子分科会員、
信田朝次分科会員、服部勝弘分科会員、平光宗基分科会員、森康次分科会員、
屋比久寿子分科会員

１　開会

２　分科会員紹介

◆事務局より分科会員の紹介

３　分科会長あいさつ

・今日は分科会ということですので、皆さんが身近に感じていることや日頃思っていることなど、岐阜市を良くしていくためにディスカッションしたいと思います。
また、会議は岐阜市への要望というよりも、住民主体でまちをつくっていくという考えのもと、事務局にとって新しい目線となるような意見を聞かせて頂きたいと思います。

４　報告

◆事務局より民間懇話会全体会概要（主な意見）を資料②に基づき説明

５　議事

・分野ごとの行政課題、推進すべき取組について
◆事務局より資料③（子育て・教育）に基づき説明
◆意見交換

〇分科会員
・人生 100 年時代を迎える中で、現在の生産年齢の考え方は、期間が 50 年とされ、人生の半分しか働いていないことになります。現実的には 15 歳や 16 歳の人はあまり働いていない一方、65 歳を超えても働いている人がいる中での、生産年齢の考え方についての事務局の考えを聞かせてください。

〇事務局
・現状では、岐阜市だけでなく全国と比較することや、トレンドを把握することなども考えて、65 歳を 1 つの区切りに考えています。社会的な大きな流れとして 15 歳～65 歳の人口が減少していることを認識していただければと思います。

〇分科会員
・学校や家庭だけが子育てや教育を頑張るのではなく、地域や社会全体で子ども達を温かい目で見守る土台のようなものが欲しいと感じます。
・公民館や婦人会などで子どもと接する活動のお手伝いなどをして感じるのは、みんなが堂々と自分の持っている能力をアピールして子どもたちに伝える場があると、子どもたちもいろいろな世界を見ることができ、世界が広がり、経験値を上げることができると思います。普段こういう場に参加しない方に参加してもらうため、行政（市）から取組内容などを紹介してもらうと、チャレンジしてみたくなると思います。こういった取組は、参加するのに少し抵抗があるため、行政が働きかけることで参加しやすくなると思います。このように、子ども達にいろいろな世界を見てもらって、多くの人に可愛がられるような地域づくりや社会づくりができたら良いと思います。

〇分科会長
・今のご意見については、地域の中といっても地域にそもそも人があまりいないという問題もある中で、まず繋がることがとても大切だと思います。全国調査では、地域子育て支援センターを利用している人の中で自分の育った市区町村以外で子育てしている、いわゆるアウェイ育児をしている人は、おおよそ 4 人中 3 人になるというデータがあります。これらの人たちは支援センターに来て、いろいろな人と出会い話ができていますが、支援センターに来られていない人がいます。
・最近、子育て支援の出会う場の拠点が増えつつありますが、そういう場を設定する際に、行政の力を借りて、安心できること、入りやすくすることが重要で、また、いろいろな人が参加し、つくり上げていくため、行政と参加する人の力を合わせ持ちながら子育てしていくことが必要という意見だったと思います。

〇分科会員
・小中一貫校のつながりやコミュニティ・スクールを進めることで、地域と学校の関係充実に取り組んでいますが、うちの地域では、いろいろな団体の人が熱心で、130 人を超える中学生がボランティアとして地域に参加し、その一方、地域からも学習支援として中学校に出向くなど、学校と地域で双方向の関係を築いています。先日、土曜授業の中で苦手分野を克服したり、得意分野を伸ばしたりするための講座として、卒業生の高校生や大学生に加えて地域の高齢者が書写を教える機会があり、世代間交流の場として良い講座となりました。地域の人にもっと学校に入っていただくよう働きかけても、なかなか難しいため、いろいろな機会をつくっていく。例えば、公民館のいろいろな講座や地域の子育てのサークルなどに参加する地域のボランティアと連携して、近い未来に大人となる中学生に、自分の力を誰かのために発揮し、誰かと一緒になって新しいものを生み出すような体験をさせることは大事だと思います。地域の人もなかなか踏み出しづらいところはありますが、多くの人材はいるため、コミュニティ・スクールをベースにしながら、世代を繋げていきたいと思います。教育をやっていく上では、最終的にコミュニティをどうしていくのかという問題になるため、コ

ミュニティの充実の観点から、小中一貫教育を進めていくことやコミュニティ・スクールを進めていくことは重要だと思います。
・子どもの貧困の問題として、地域から子どもが孤立している事案があり、いろいろな関係機関とネットワークを組んでやっていますが、地域の人が手を差し伸べようと思ってもなかなか難しい状況も見られます。貧困はお金の有無ということよりも、保護者がどう子どもに接しているか、どう育てているか、つまりは、単なる経済的な格差よりも、子育ての質の格差がものすごくあり、その結果が子どもの不安定さや将来へのモチベーションなどにつながるような気がします。学校は福祉機関ではないですが、実際に福祉的な動きを随分しており、どう関わっていくのかが大きな課題だと思います。

〇分科会長
・学校の中にいろいろな外部の人が入って先生と一緒に子どもを支える時代の中で、地域も学校の有効な資源としていろいろなお手伝いができると思います。やはり、最初の入口を設定しないと、なかなか学校にも公民館などにも参加しにくいため、最初の仕掛けづくりが必要かもしれません。

〇分科会員
・結婚しない、結婚できないことは、少子化に影響を与えていると思います。その理由はいろいろあると思いますが、経済的な理由や出会いがなかなかないことが理由にあると思います。経済力は昔と今でも変わらないかもしれませんが、昔はとにかく子どもが多くできても、何とかしてみんなで協力して育てられましたが、今はそういうことができていないこともあると思います。また、昔は、見合いをしたり、女性でも男性でも、ある時期が来ても結婚しないと別の方が異性を紹介してくれて、結婚して子どもを産む世帯が多かったのだと思います。人口減少や少子化の中では、子育ての前提となる子どもができる環境、つまり、結婚ができる環境をサポートすることを、子育て環境とともに考えることが大事だと思います。

〇分科会長
・結婚するかしないかは経済力と連動しているという調査結果を見かけることがありますが、結婚しないで子育てしている方もいますし、妊娠をしたら結婚しようかという方もいる現状もありますので、その辺りも含めて考えなければいけないと思います。一方で、結婚は個人の領域ですので、強要することは難しく、結婚したいと思う環境をつくることは大切なことだと思います。
・大学も入学試験だけではなくて入学金を払わないと入学できない状態になっていますのでそういう経済力がある程度ないと結婚も子育ても難しいということも頭の片隅に入れておかなければいけないと思います。

〇分科会員
・われわれ大人世代は次世代に世界を残すために頑張らなければいけないと思います。まず幼少期の子どもたちのために何ができるかをしっかり考える、そういった意味では、人への教育や人への投資については、見返りや費用対効果を重視しない予算組みをお願いしたいと思います。先行投資ではないのですが、人への予算や投資は返ってくるものではなく、喜んでもらえればよく、そして次世代に使っていただければ良いと思います。
・先ほどの話のように、学校が地域と学校を繋げる仕組みをつくり、地域はその恩恵を受け活性化していると思っています。ただ、学校の先生は期限で変わってしまうので、学校が一生懸命仕組みをつくろうとしても、地域から学校に繋がないと、学校だけでは地域に浸透していかないと思います。その意味で、PTA は、その地域に住んでおり、学校と地域を繋げやすく、地域を活性化させることができると思います。
・放課後、子どもたちの行く場所がないと言われたことがありました。昔であれば、地域の公園で遊べば良いと言われましたけれども、今はなかなかそうはできません。行政が放課後児童クラブをつくり、地域の方や共働きの方は助かっていると思います。ただ、そうでなくても地域で安心・安全でいられる施設、例えば、相反するように見えますが、そのような商業施設があると助かると思います。安心・安全であれば、良い社会勉強もできるのではないかと思いますので、児童や生徒が安心・安全でいられる場所が学校やその他で確保できると良いと思います。
・このような状況にならざるをえないことは社会の一つ問題と感じています。なぜそうなるかというと、家に帰っても誰もいないからです。祖父も祖母もいないし、父も母も仕事でいません。私が知っている方の中で、子どもを迎えてあげたい、親として子どもをお帰りという笑顔で迎えてあげたい、そういった家庭をつくりたいと言われる方がいます。なかなか難しいことかもしれませんが、いってらっしゃいと子どもを送り出して、お帰りと笑顔で迎えてあげられるような温かい家庭のある社会になると良いと思います。そうなることで、いろいろな方が岐阜市に住んで良かったなと思い、家庭は良いものだ、結婚は良いものだと若い方に思ってもらい、家庭を持たれる方がまた増えるという良いスパイラルが生じると良いと思います。

〇分科会長
・PTA の方は、地域のことも子育てのことも学校のことも知っていて、ちょうど接続する部分になっているということだと思います。

〇分科会員
・教育の分野別課題の「高等教育などの充実」において「教育研究の充実」や「知の拠点」という項目の中に、市立岐阜女子短期大学や岐阜薬科大学の記載がある中で、市内にある岐阜大学や、中部圏の大学などの記載がないため、それらを入れると、視野が広がると思います。

・プログラミング教育は、2020 年から義務教育化されるが、教える側の準備は結構大変なため、先生たちのサポートも少し考えてもらえればと思います。
・子ども同士がお互い助け合って、大人の力を期待しなくても問題解決し、先生は、答えを与えるのではなくて、解決の方法を支援する形で指導をしていくことが大事で、そうすることで子どもは力を伸ばして、AI の研究者になりたいと思う子どもたちが出てくることを期待しています。

〇分科会長
・アクティブ・ラーニングのようなことが重要ではないかということだと思います。

〇分科会員
・子育てと教育でいえば、例えば中学生の子が小学生の子を指導する取組があり、弟や妹のいない子はものすごくいるので、若い世代がさらに若い世代を指導するような、教育の中にも子育ての要素を盛り込むことは重要だと思います。
・昔は三世代同居というケースが多かったですが、核家族化が進み、祖父や祖母が孫と一緒に住んでいないケースが多くなっています。例えば、高齢者の生きがいや地域活動の場として、高齢者が孫世代を教えていくことは重要であり、その知識を学ぶことが生涯学習には必要になってくると思います。このように、社会全体や地域全体が一つの家族のような考え方をみんなが持てば、いろいろなことが変わってくると思います。

◆事務局より資料③（ひとの尊重・生きがい）に基づき説明
◆意見交換

〇分科会員
・私の住む地域では、福祉事業所、特別養護老人ホームなどを特別な施設と受け取っていません。高齢者の方の住まいという位置付けで、地域の全てのイベント等々についてもご案内していますし、敬老会にもできる限り参加いただいています。
・当地域は 1,700 人ほど敬老会の対象人数がいらっしゃいますので、その方々が安全で安心して会に参加いただけるように気付いたことは全て改善しています。実は、何年か前まで小学校の体育館に洋式のトイレがありませんでした。しかし、小学校の体育館は避難所になっています。岐阜市とお話し合いをさせていただき、市の中で最初に体育館に洋式トイレをつくっていただきました。今では、電動車椅子や普通の車椅子でご参加いただいています。施設からも介助の応援に来ていただいています。敬老会の前日は、福祉事業所の職員に来ていただいて、トイレ介助の方法のレクチャー会を行っています。そうすると若い世代が関わってくれます。若い世代が関わるというのは、高齢になってお体が不自由になるとこのようなことになるのだと実際に体験することにつながります。
・子どもたちに学ぶ機会があればということで、薬科大と連携して、災害時に持っていくことのできない薬の大切さなど、薬科大の先生に来ていただいて、子どもたちに勉強会を開き

ました。そして、家族など、周りの人に薬は大事だと伝えるよう勉強会をし、子どもたちをコミュニティの最初の発信地にして、つながりを持つことができました。
・高齢者に対しては、ぬくもりサロンを毎月やっています。私がこの役割を担うようになった時は、サロンは地元に１カ所しかありませんでした。その後、このサロンを分散化したのは、元気なスタッフがいて、足が不自由な方やなかなか足が運べない人に会場まで来ていただく体制はおかしいと思ったからです。地域の中の世帯数マップに色分けがあり、サロンの会場として順番に巡回しています。そうすると、顔なじみができます。顔なじみができる中で、皆さんが、名前は知らなくても「この間、調子が悪そうだったけれども、どうだった？」と声を掛け合います。その中で、今度は「うちのおばあちゃんが行っているけれども、おばさん、いつもありがとう」と次の世代と親世代がつながります。生きていく力とつながる力を自然に育てています。
・見守りのキーホルダーの取組を実施しています。キーホルダーは自主申請で、かかりつけ医や飲んでいる薬の情報、連絡先などの個人情報を載せています。また、個人固有の番号も振ってあり、個人情報なので個別での対応はしていませんが、その番号で市役所や消防、警察、どこからでもお問い合わせいただけますし、キーホルダーを持っていると、徘徊で保護された時も、交通事故に遭われても、すぐ本人を特定できるので、薬の重複もありませんし、情報が早く伝わることから、多くの方にキーホルダーを持っていただいております。これらの取組は、地域のつながりや見守りの中に入ってくるのではと思います。子育ての見守りも大事ですが、地域の中でお住まいいただいている高齢者も見守ることが大事だと思います。
・情報のつながりという部分も、子育て世代から年を重ねた世代までが安心して地域にお住まいいただける部分です。

〇分科会長
・自分たちの我が地域のことを考えてつくり上げられた形だと思います。これが地域の面白さであり、逆に難しさでもあると思うのです。

〇分科会員
・50 あるおしゃべりサロンの会場は、サロンの参加者がそれぞれの自分に縁のある喫茶店などに交渉していただいて、お店側から手挙げしていただいたところがほとんどです。この中の一つに、モデルハウスのキッチンとリビングのある所をお貸しいただいており、掘りごたつがあって、普段とは違った雰囲気でご参加いただける会場もあります。会場を提供する側から、この会場もどうですかと声を掛けていただき、皆さんから逆発信で頂いているのです。とても平和的な関わりだと思います。

〇分科会長
・なかなか、つなぐといった時に地域によって温度差があって、大体、昼間にほとんど人がいないような地域もあれば、地域の中にご高齢の方がたくさんいらっしゃる所など、いろいろと地域の実情は様々だと思います。サロンの運営主体は、今月の担当は老人クラブや民生

児童委員などというように、いろいろな地域の社会資源の方たちが関り、当事者になっているところが面白いと思います。貴重な活動実践をお聞かせいただいて、ありがとうございます。

〇分科会員
・幾つぐらいの団体がお世話されているのでしょうか。

〇分科会員
・私の地域では、子ども会であったり、青少年育成市民会議であったり、老人クラブであったり、女性防火クラブであったり、地域で 21 の団体がありますので、その中で福祉団体といわれる所にご協力いただいて、今月は自分たちの番だからと自分たちでアイデアを出していただいています。老人クラブは高齢者の特殊詐欺を身近に感じていらっしゃるので、そういうところをみんなに伝えたいということです。老人クラブは、大変多くの方に参加いただいています。あるサロンについては、年間を通して民生委員が運営しています。また、おしゃべりサロンは、先ほど言いましたように、この会場まで来られない方が自分の近くの喫茶店や会場であればということでお出掛けいただけています。「晴ればれカフェ」は参加いただくと心が晴れ晴れとして帰っていただけるということで、2 時間、歌いっ放しで帰られます。ここも 80 人から 100 人の方が参加します。

◆事務局より資料③（医療・健康・福祉）に基づき説明
◆意見交換

〇分科会長
・欠席委員から、資料を頂いているため、事務局よりご説明いただければと思います。

〇事務局
・本日ご欠席の委員の方からヒアリングをさせていただきましてお言葉を頂戴しています。医療に関して 2 点の意見をご紹介します。
・高齢化によって住みやすい地域や自宅で人生を全うするため、地域医療における在宅医療が高まる中、急性期医療から在宅医療へのつながりが重要で、病気になった時に入院した場合、退院後すぐに病気前の生活ができる人は少数であり、特にある程度の年齢以上の方が大病を患うとすぐに介護が必要な状態になってしまうことが多いです。病気を発症してから社会復帰までの流れについて、脳梗塞を発症し、まひが残ったケースを例にします。まずは急性期に市民病院で 2～4 週間の入院をし、手術と早期のリハビリ後、転院しまして、1～3 カ月かけて回復期のリハビリを行います。その後、退院して自宅に戻れることが決まると、まひが残り、通院してリハビリを続けるケースと昼間に自宅に 1 人でいることへの不安からデイケアやデイサービスを利用するケース、また大病院への通院が困難で近隣のクリニックへ在宅主治医を依頼するケースといった対応が考えられます。そのために、退院前のカンファ

レンスとしまして、本人と家族と入院主治医、退院後の主治医、訪問看護師、薬剤師、介護事業者、ケアマネジャーなどがチームとして話し合って、入院中の病院の相談医が企画して、医療と介護をどうしていくのか、本人や家族の希望に添えるよう聞き取りをしながら、ケアマネジャーを中心にプランを考えていくことになっています。このように、一人の患者さんに在宅で生活できるようにするためにはたくさんの職種の方々の協力が必要であり、連携を図って効率的に行っていくことが重要です。こういった視点から、病気からスムーズに社会復帰できる岐阜市が望ましいというお話をいただきました。
・新しくがんと診断された人たちの中で 20 歳から 69 歳の就労可能な人たちは 42%を占めています。また、がんと診断されて 5 年間生きることができる生存率は 60%以上になっており、がんを患い仕事を持ちながら通院している人は約 32 万人いらっしゃいます。がんと診断された人に今後の就労の意向を聞きますと、約 8 割の人が就労を希望しており、その理由としては、家計の維持や自分の生きがいのためといった回答が多くなっています。就労可能人口の減少が進んでいることや、がん患者が、家計や治療費の捻出のため、またご自身の生きがいのために就労を重んじているという現実の視点から、がんになっても働き続けられるような職場をはじめ、市民の意識の改革が必要との意見をいただきました。

〇分科会長
・先日、がんでも働き続けるという CM が流れていて、今、そういう方が私の身近にいることを思いながら聞かせていただきました。今の意見の中で、多職種のいろいろな方たちが連携や協働をしていかないと一人の方を助けることさえも難しいとご意見をいただいたと思います。
・その他にも健康・福祉ということで少し話を広げていきたいと思います。健康のところでは、こころの健康にも触れていただいているのですけれども、私は、人のメンタルヘルス、こころの健康づくりにも携わっているのですが、健康は肉体的・精神的・社会的に満たされた状態であると WHO で言われていて、体が動いていればそれで良いのではなくて、体とこころは連動していますし、先ほどのお話の中にもあったように、社会の中でどう人とつながって、満たされた状態を維持していくことができるかということにつながっていくと思います。最近、岐阜市の保健所から自殺防止のゲートキーパーの講演を頂いたことがありました。ゲートキーパーは、悩んでいる人に気付いて声を掛けて、話を聞いて、必要な支援につなげて見守る人ということで、特別な専門的な知識などはなくても、寄り添う人なのだという説明を聞かせていただきました。こういう寄り添う人に出会うためにも私たちの地域の中でいろいろな人たちがつながって出会っていないといけません。先程のお聞かせいただいていると、日頃から親しんでいるのでささいな変化に気付くことができるということです。時には暗い顔をされていることもあると思います。その時に、どうしたの？という一言を掛けられるかどうかでその後を大きく変えていくと思います。子育ての時でも楽しそうな時でも悲しそうな時でも、声を掛けてもらえるとうれしい気持ちになります。いろいろな人がつながっていく取り組みの仕掛けづくりは大切と思って聞かせていただきました。一方、私は時々、小学校などに行ったりしますが、小中学校に入学する時に障がいがあることが分からなくて

も、入学後に学習が遅れていたり、人とのコミュニケーションが難しい発達障がいのお子さんなども随分増えていると聞いています。

〇分科会員
・発達障がいは、その子の資質だけでなく、環境が影響する部分があるので、個別の障がいに向き合うよりも、周りの集団をどうやって育てていくかがすごく大事だと思います。発達障がいは外から見えにくいですが、うちの学校でいうと身体障がいの子や、聴覚障がいの子がいますし、いろいろなお子さんが当たり前に存在するという感覚を小さいうちから身に付けることはすごく大事だと思っています。普通にその子はそこにいて、困ったら誰かが手を差し伸べて、そのことがすごく自然体です。感覚として誰もが普通にその子のままいれば良いということを意図的に小さいうちからやっていく必要がとてもあると思いました。障がいを持ったお子さんが寝たきり状態でお母さんがすごく恐縮されてたけれども、そうではなくて、その子たちに接せられる子どもたちにもすごくプラスになるのです。そういう相互の関係性のようなものの温かさを幼少時からたくさん味わわせて、それを自然にしたいと思いました。大人の偏見を打ち破るのはなかなか難しいですが、偏見を持ちにくい世代から当たり前にそういうことができると良いと思っています。

〇分科会長
・学校は子ども同士のつながりがつくりやすいところでありますが、そこに様々な地域の人が入っていって、いろいろな人との出会いがあって、その中には、ご高齢の方もいらっしゃって、学校と地域のご高齢の人たちがつながっていくと、様々な人がいて面白いということも肌で感じることができますし、そういう中で、人というのは良いものだと思うと、結婚にもつながるのではないかと思います。岐阜市は本当にひとを大事にして、この「ひと分科会」をつくっているけれども、「ひと」あってのまちということになります。そこの中でいろいろな人たちがつながっていくことが大切なことで、つながる仕組みづくりが大事になってくると思います。声を掛ければいろいろな方がお知恵を下さるのですけれども、私も小学校がこれほど開かれると思いませんでした。最初は事故や事件などもあって門が閉まったままで、なかなか入っていくなどというのは難しかったのですけれども、開かれた効果などを聞かせていただくと、学校を地域のコミュニティの拠点として、いろいろな世代の人たちがつながると良いと思います。
・本日は、いろいろなご意見を聞かせて頂きましたが、最後に一言ずつお願いします。

〇分科会員
・今やらなくても、困っている人に誰かが手を差し出すだろうという考えがありますが、そうではなくて、指示を待つのではなく、気付いたら考えて、一番すべきことを行動に起こすことが大事です。大人も子どもこのように考えでやり、地域、それからよその地域へ発信していく仕組みが岐阜市の中で受け入れられていけばと思います。

〇分科会員
・学校では主体的・共同的な学びをやっていて、子どもの意思や、他者と一緒になってやっていく力の大切さを重要視しています。私たちは人とつながらずには生きていけないので、どういう形でつながるとそこで自分が生かせるか、その結果、自分の自己肯定感が持てれば最高だと思います。何よりも子どもたちの中で、人は信じることのできるという具体的な信頼感のようなものを、自分に対しても他者に対しても培っていければと思います。

〇分科会員
・結婚したい人が少なくなっているかと思っていたのですけれども、9 割近い人が結婚したくて子どもが欲しいという願いを持っていらっしゃる。これに応えられる社会づくりは必要だと思います。
・65 歳未満の死亡の原因の 3 番目の自殺（8.4%）になっているので、こういうものも減らしていくような社会づくりが必要だと思います。

〇分科会員
・高齢化社会で長生きされる人が増えましたが、健康でいかに長生きするかは大きなテーマです。最近、認知症が非常に増えていますが、同居をしていても、認知症の境目は外から見て気が付きにくく、統計的に見ると老化とともに認知症になる確率が非常に高くなっています。しかし、認知症の研究でサプリメントなどにより、早く発見できれば進行を抑える治療もできるということです。明日は我が身かという感覚もしますが、もう少し認知症に対する地域の理解や協力あるいは予防と対応、早期発見など、こういう人たちに目を向けるような施策が必要ではないかと思います。これにもっと目を向けて、予防と対応、周りの理解と地域の協力。大きな課題であると認識しています。

〇分科会員
・ロボカップジュニアという活動を通じて、子どもたちといろいろな勉強をしているのですが、父母も一緒になって活動していただいており、この輪をどんどん広げていきたいと思います。
・科学館は折角良い活動をしているにも関わらず、PR が足りないと感じるため、大いに PR をしていき、子どもたちの科学館に行く機会が増やして、その結果、世界に出ていくような子どもがどんどん出てくれるとうれしいと思います。

〇分科会員
・仕組みも行政もとても大切ですけれども、それを超える人のつながりを大事にしなければならないと思います。仕組みなどに頼らず、自分たちの手や足で自分たちが動いていき、自分たちが何か事を起こすことの必要性を強く感じました。
・児童や生徒は学校や地域からいろいろなことを学びます。親ももっと親として学ばないといけないと思います。家庭力ということをよく口にしますが、自分はもう親だから不要とい

うことではなく、学び続けるといったことが必要だと思います。
・小学校で「笑顔いっぱい」というキャッチフレーズをよく聞くことがありますが、小学校だけではなくて、岐阜市全体が笑顔で楽しく過ごせるようなまちづくりや地域づくりができると良いと感じました。

〇分科会員
・自分の健康と自分の幸せは自分で守るのだという意識を本当に全員が持たないといけない時代になっていると思います。防災の面でも一人一人が自分でやるのだという意識をどうつくるのかを医療教育で伝えることができます。ニューヨークやエルサルバドルでは導入されていて、実際にエルサルバドルでは治安が良くなった事例も出ています。ニューヨークなどは医療教育の日という祭日があります。私は、自分たちで何とかするのだという心意気や自分たちで何とかするのだからきっと良くなるのだという前向きなエネルギーを岐阜市に満たしていきたいと思っています。今日は自治会連合会の事例を聞いて希望が出ました。

〇分科会長
・幼稚園や保育園で絵本の読み聞かせをする理由は、直接的なコミュニケーションが脳をすごく活性化させるからです。特に前頭葉という人が持っている人らしいところを活性化させる効果があります。私は会話が好きなので、よくお茶を飲みに行ったりしていろいろなお話をしたりするのですが、その時に友達などと直接なコミュニケーションをして、日頃の思いなどを話す中で自分の思いを新たにすることがあり、そういうお話で女性のほうが男性よりも長生きというデータもあります。脳を活性化させることが、ご高齢の方の認知症にもつながっているというデータもあります。そういう直接出会う場を地域の中でつくっていく。ネット社会で、簡単にスマホで様々なことができる時代になってきているからこそ、直接的なコミュニケーションを大切にできる岐阜市であっていただきたいと思います。
・「ひとの分科会」の共通項としては、地域で様々な世代がつながる仕組みづくりが行政課題かということを思いました。そのための仕組みづくりは、ある程度、最初は仕掛けが必要かもしれないですけれども、その後はそこで出会う人たちが主体的に活動や行動ができるような仕組みをつくっていくことです。最初から最後までお客さんではなく、そこから、今日ご紹介いただいた自治会連合会の取り組みのような自分の我がまち、我が村をどうしていくかというふうに主体的に活動できるところに持っていくことが大切なのではないかというご意見が多数寄せられたと思います。本日、委員の皆さまから頂いた様々なご意見は、(仮称)岐阜市未来ビジョンを策定していく中で参考にしていただきたいと思います。

６　閉会